



お話を伺った先生方。
校長・小林 格先生、経営企画部長・片山寿弘先生、
教頭・武藤浩司先生、教頭・鈴木 悟先生、
教務主任・黒宮祥男先生、教務主任・田中博之先生。

SDGsを軸に生徒と社会、地域と世界をつなぎ 世界のどこにおいても問題提起し行動できる グローバル人材を育てる

本場のグローバルには 地域の視点も必要

名古屋市中心部にほど近い市街地にあり、「世界と日本の未来を担う国際人になるために」をスクールポリシーとする名古屋国際中学校・高校。同校が掲げる「国際人」には、「知識やスキルをもつだけでなく、それを活用して国際社会に貢献する実践力をもつことができる」(小林 格校長)、「単に言われたことをやるのではなく、問題提起ができ、周囲を巻き込みながら自分なりに解決しようとする」(鈴木 悟教頭)、「将来どんな職業に就こうとも、常に地球規模で考え、自分さえよければいいではなく、他者や社会を良くするために自ら行動できる」(教務主任・黒宮祥男先生)など、主体的に社会に貢献していく意味が込められている。

そんな人材を育てるため、同校はこれまで国際バカロレア・ディプロマプログラムを導入し、貧困や環境問題をテーマに海外研修を組み込んだ国際理解カリキュラムを開発するなど、世界を

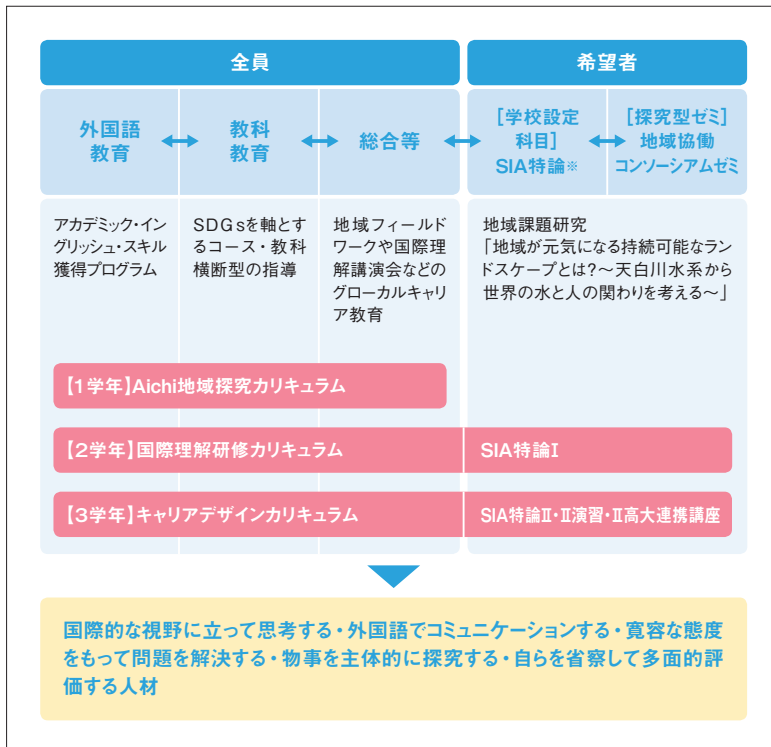
視野に入れた教育を行ってきた。生徒の海外志向は高まり、海外大学への進学も目立つようになった。そのなかで、「海外で現地の人と意見交換すると、日本についての理解不足を痛感する生徒が多い」(武藤浩司教頭)、「フィリピンのごみ問題には興味をもつのに、地元の佐久島のごみ問題には見向きもしない。それは真の『グローバル』といえるのか」(教務主任・田中博之先生)と、足元にある地域の視点の重要性に改めて目を向けるようになったという。

「世界のどこにいたとしても、その場所で自分の最大のパフォーマンスを発揮できるようなってほしい。そのために身近な地域を含め、世界を俯瞰して物事が考えられる本質的な力を育てる必要があると考えました」(田中先生)

国内外のネットワークを活用した 段階的なカリキュラムをスタート

そこで、これまでの国際的な活動をベースに、生徒と社会、地域と世界を結び付けるフレームとしてSDGsを活用したグローバル型のカリキュラムを

地域連携によるカリキュラムの概要



※SIA=Sustainability in Action!

取材・文／藤崎雅子

設計。今年度から、地元自治体、企業・団体、教育機関などと共にコンソーシアムを構成し、これを核として地域社会との連携を強化した体制のもと

で実施している。「勉強にやらされ感のある生徒が多いのは、学んだ先が見えないから。そのヒントをくれる、先生を学校外の社会



地域社会と協力し、生徒を育てる体制

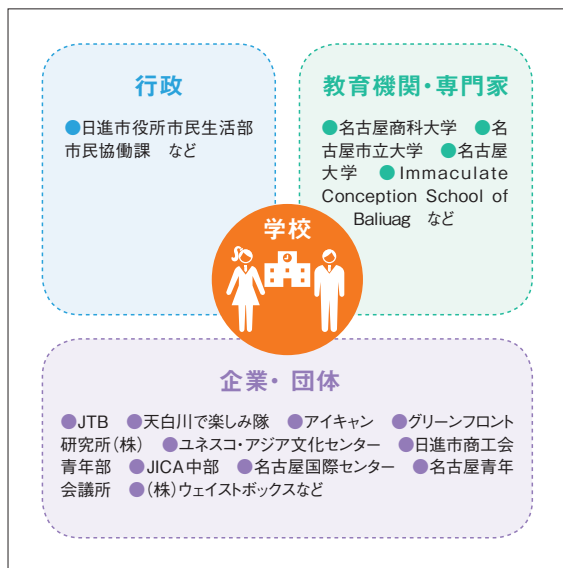
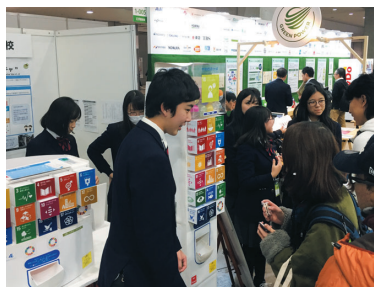


図1 SDGsを軸にした教科連携カレンダー ダウンロード可

	4月	5月	6月	7月
国語	10, 13, 14, 15 【小説】『作品を通じた新たなことへの「挑戦」・近代文学名著に触れる【評論】論理をつかみ、日本文化の特色に興味を持つ【詩】作品から人生観・自然観を理解する			
地歴	3, 9, 16 【世界史】産業革命や民主革命など歴史変遷と文化の相関を理解し、各時代における人々の幸せを考察する。			

各教科では、単元ごとに関連するSDGsの目標の番号を記入。



東京で開催されたエコプロダクツ展にて、SDGsに関するアンケートを兼ねた自作のガチャを提供する「Sus-Teen!」メンバー。

に求め、多様な生徒に「学ぶことは楽しい、もっと学びたい」という意欲を醸成していきたい(黒宮先生)

このカリキュラムの基盤となるのは、社会とのつながりを重視した各教科の授業だ。各教科が単元ごとにSDGsのどの目標とつながるかを挙げて意識

的に授業を行うとともに、それを一覧にして他教科と共有することで教科間の連携も推進している(図1)。

「例えば、歴史が未来の街づくりなどに影響していくかを話すなど、SDGsに絡めたひと言があるだけで生徒の捉え方は変わるもの。小さなところから教科と社会をつなげていくことを大切にしています(黒宮先生)

総合的な探究の時間の柱は、地域との協働によるキャリア教育だ。第二線で活躍する社会人を講師とする講演会や、県の魅力を世界に発信できる人材像を考えるワークショップなどを行い、将来の生き方を考える機会としている。

さらに2・3学年では選択科目として、地域・世界の課題に取り組む探究活動を中心とした学校設定科目「S-A特論」および「地域協働コンソーシアムゼミ」を設置。多様な生徒がいるなか、最初から全員一律のレベルを求めるのではなく、まずは何かやりたくてうずうずしている生徒が思い切り活動できるステージを用意したという。

これらの科目では、フィールドワークによる地域課題の調査・分析や、大学教員から専門的な視点で学ぶなどし、高校生にできることを考え、行動に移していく。地元の天白川水系を起点として世界の水と人の関わりを考える課題研究にも取り組む。

「都市部には地方のように死活問題といえる社会課題は少ないが、人の歴史と文化がある。それらを最大限に活

かし、本校ならではの取組を目指しています(黒宮先生)

そのためには、持続可能なコンソーシアムのあり方を探っていくとともに、連携のネットワークのさらなる拡大を図っていく考えた。

「地域との連携は、学校から一方的にお願いするだけでは難しい。高校生ならではのアイデアを出して街の魅力を発信していくなど、生徒の力を社会に還元することが、連携の持続、発展につながると思っています(黒宮先生)

これまでにない前向きさが引き出される生徒も

こうした地域協働によるカリキュラムの実践の方向性に大きく影響したものに、2年前に生徒主体で結成した、持続可能な社会づくりを目指す「Sus-Teen!」(サステイン/ Sustainable Teenager)というグループ(今年度から部活動)の実績がある。酸性雨などに関する名古屋環境局や他校との合同調査、社会で活躍する人の考え方・生き方をインタビューしてまとめた冊子の作成、持続可能なまちづくりのアイデア提案など学校外を舞台に活動し、各種コンテストで入賞。取り組んできたメンバーは目覚ましく成長した。なかでも、「斉授業では埋没していた生徒が目覚まして」「Sus-Teen!」の活動に取り組む姿や、コミュニケーションに苦手意識のあった生徒が得意分野を活かして楽しそうにチームに貢献

生徒のEYE

社会は自分たちの手で変えられる

●名古屋市の課題をどう解決するか、SDGsの考え方をどう広めていくかなどについて、自分たちでアイデアを出し、大人の方の協力や助言をもらいながら取り組むうちに、社会は自分たちの手で変えられると思うようになりました。将来、ゼロからイチを創り出して社会に役立つことをしていけたらと考えています。(石川さん)

●社会課題をテーマにいろんな大人の方と話す機会もあって、自分から質問したり自分の考えを語ったりできるように、視野も広がったと思います。こうして新しいことを知る、世界を広げることはとても楽しいのだと知りました。(大島さん)



左から、中学2年で「Sus-Teen!」を始めた高校1年の大島 梨紗子さん、石川愛子さん。